

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19510282
 研究課題名 (和文) セクシュアリティの観点から見た近代フェミニズム思想の成立と展開
 研究課題名 (英文) The Rise and Development of Modern Feminism from the Viewpoint of Sexuality
 研究代表者 川津 雅江 (KAWATSU MASAE)
 名古屋経済大学・法学部・教授
 研究者番号：30278387

研究成果の概要 (和文)：本研究の成果によれば、近代イギリスに生じたフェミニズムの言説は、ホラティウスのいう「男性的なサッポ」のような男性に匹敵する知性をもつ女性を理想像として提示したとき、そのセクシュアリティも「男性的な」(古来女性同性愛もしくは淫乱を含意)ことを否定し、むしろ異性愛関係において「無性的な」(情欲がない)ことを強調した。こうした男性的女性の無性化は、強制的な異性愛文化・社会の出現と関連があった。

研究成果の概要 (英文)：According to the results of this research, feminist discourses that emerged in modern Britain presented the ideal of women as being equal to men in intellect, such as Horace's "masculine Sappho." However, in denying women's masculine sexuality (which had implicated female homosexuality or licentiousness since ancient times), these discourses instead insisted on women's asexuality (without sexual passion) in heterosexual relations. The asexualization of masculine women was related to the rise of a compulsory heterosexual culture and society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：ジェンダー・セクシュアリティ・フェミニズム・英米文学・西洋古典

1. 研究開始当初の背景

本研究は、本研究開始前五年間の間本研究者がなしてきた18世紀イギリスにおけるサッポと呼ばれた女性詩人たちの研究

や18世紀末から19世紀はじめの女性同性愛のさまざまな表象とサッポの受容の関係についての研究を出発点とし、それらをさらに発展させて、精緻な分析の対象

を強制的異性愛文化・社会の登場と近代的フェミニズムの誕生の関係にまで拡大したものである。

従来、セクシュアリティや同性愛の概念は19世紀末のヨーロッパに生まれた比較的新しい概念であり、それ以前には性の欲望の認識はなかったと見なされていた。特にヨーロッパで唯一女性同性愛を罰する法規定のなかった国であるイギリスでは、ソドミーに相当する女性間のセクシュアルな行為の認識もなかったと考えられていた。しかし、本研究者のこれまでの研究によって得られた知見によれば、18世紀後期にすでにサッポーから派生した“Sapphism”や“Sapphist”などの語が現代と同じ意味でイギリス女性に対して用いられ、サッポーから綿々と続く女性同性愛の伝統も批判的に指摘されていた。その一方で、同時期に流行した「ロマンティックな友愛」と呼ばれた女性間の親密な関係は、1980年代のレスビアン・フェミニズムに通底する思想を孕んでいたにもかかわらず、同時代の人々に容認もしくは絶賛された。それは当時異性愛関係だけがセクシュアルな関係であり、女性間はいくら親しくともセクシュアルな関係ではないと見なされていたので、家父長制社会にとって何ら脅威ではなかったからであった。これらの知見の結果、イギリスにおける女性同性愛の顕在化と同時に周縁化の現象が強制的な異性愛の出現や近代的フェミニズムの誕生と密接な関係にあることが予見された。また、Claudia Johnson (*Equivocal Being*, 1995)が保守派の Richard Polwhele (*The Unsex'd Females*, 1798)のいう“unsex'd”を“oversexed”の意味として解釈したように、初期のフェミニストたちに対する批判的言説がセクシュアルであることはすでに指摘されてきたが、その言説の構築にサッポーの虚構的表象が深く関与していることが予見された。従って、本研究は従来のフェミニズムやジェンダー研究で欠けていたセクシュアリティの視座をとり、さらに一次資料としてサッポーの虚構的表象など人文科学の分野を考察の対象にしている。

2. 研究の目的

本研究は、イギリスにおける近代フェミニズム思想の成立と展開をセクシュアリティの視座から包括的に考察するものである。具体的には、イギリスにおけるセックス/ジェンダー・システムとセクシュアリティ観を古代ギリシャの女性詩人サッポーの虚

構的表象（文学的言説や絵画的イメージ）などを通して領域横断的に考察することによって、強制的な異性愛文化・社会の出現と近代フェミニズム思想との関わりを解明することを目的とする。研究期間内に解明するのは、以下の3点である。

(1) サッポーの投身自殺伝説の脱神話化の過程

18世紀から19世紀はじめのイギリスで、サッポーの投身自殺伝説（オウィディウスが描く詩人のサッポーは年下のパオーンに失恋してレフカスの岩上から海へと投身自殺した）がどのように脱神話化され、繰り返し表象されたのかを、詳しく検証する。

(2) ジェンダー・バイアスの自殺観と異性愛中心主義

サッポーの投身自殺表象の背後にはどのようなジェンダー・バイアスの自殺観、崇高審美観、恋愛やセクシュアリティ観が潜んでいるか、女性の投身自殺表象の流行が異性愛を強要する現代的な異性愛文化・社会の出現とどのように関わっているのかという問題を領域横断的な一次資料を用いて明らかにする。

(3) セクシュアリティの観点からの近代フェミニズムの言説の分析

以上の個別実証的な研究成果を踏まえ、ブルーストッキング・サークルやメアリ・ウルストンクラフトなどのフェミニストたちに対する批判的言説がどのように「男性的な」サッポーの言説の系譜と重なり、男性の領域へのジェンダーとセクシュアリティの両方の侵害として見なされているかを考察する。またこれらの近代フェミニストたちの言説をセクシュアリティの観点から分析し、18世紀末のサッポーの異性愛者化の文化・社会的傾向と近代フェミニズムの成立と展開の関わりを解明する。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するためにとった方法は以下の3点である。

(1) 資料収集

本研究は主に一次資料研究によって行われる。そのため、研究初年度から、これまで収集したサッポー関係、同性愛・女性同性愛関係、イギリス近代大衆文化関係などの文献・刊行物をより一層充実させるとともに、最新のジェンダー理論およびセクシュアリティ理論関係の文献を精力的に収集した。特に18世紀から19世紀に出版されたフランスにおけるサッポー関係の詩や

フィクション、ダシエ夫人などの研究書、ピエール・ベールの百科事典の英訳版など国内の図書館では入手不可能な貴重文献については、ブリティッシュ・ライブラリーやケンブリッジ大学図書館などで海外調査を行い、電子版や複写の形で収集した。また、ウェールズのスランゴスレンにあるブラス・ネウィズ（18世紀末から19世紀はじめのロマンティックな友愛関係の代表的カップルである「スランゴスレンの貴婦人たち」の家）において、当時の貴重な視覚的資料や手紙などの文献を調査研究した。ギリシャで開催された国際学会のあとは、サッポアの出身地であるレスボス（ミティリネ島）に渡り、現地でしか得られない資料を収集した。

(2) 資料の精読・分析とデータベース化

本研究目的欄に挙げた3点を解明するために、収集した広範な領域にまたがる資料・文献・刊行物などを精読・分析し、データベース化して検索可能なかたちに変えた。これらの作業は本研究の研究期間中最も多く時間を費やした。具体的には、まず全体的な研究の基礎を固めるために18世紀イギリスのジェンダー表象とセクシュアリティ論に関する海外の最新の研究成果を調査・総括し、次に18世紀におけるサッポアの詩の一連の英訳、オウィディウスの「パオーンに宛てたサッポアの手紙」の英訳や翻案詩、ダシエ夫人の書、ピエール・ベールの百科事典、アベ・バーセルミーの虚構の旅行記などサッポア関連の一次資料を精読・分析する作業と並行して、18世紀末期から19世紀はじめのイギリスのフェミニズムの言説や反フェミニズムの批判的言説あるいは嘲笑的・戯画的言説などを個別的にサッポアの受容とセクシュアリティの視点から解読した。

(3) 研究成果の公表

研究成果の一部については、随時、国内外の主要学会において口頭発表するとともに、日本語もしくは英語の論文を学会誌や所属機関の紀要、共著などで公表した。口頭発表時やその他の機会には、イギリス文学・文化・フェミニズム思想の研究者たちと意見交換し、適切な指導・助言などを受けることによって、本研究の精度を高めるのに努めた。

4. 研究成果

本研究の主な成果としては、以下の3点の内容に大別される。(1)は本研究目的欄に挙げた3点の解明目的全体の基礎となるもの

である。(2)と(3)は3点の解明目的すべてに該当するが、(2)は女性の言説、(3)は男性の言説を分析対象にした。

(1) 18世紀イギリスのジェンダー表象とセクシュアリティ

①愛知女性研究者の会における招待発表「18世紀イギリスにおける女性とセクシュアリティ」では、18世紀の医学書や両性具有者論における女性同性愛に関する身体的表象とセクシュアリティの言説を辿ったあと、個別ケースとしてメアリ・ハミルトン、スランゴスレンの貴婦人たち、そしてアン・リスターを取り上げ、現代的なセックス/ジェンダー・システムが成立したのは18世紀後期であったことを論じた。

②論文『『女性の夫』のジェンダー偽装とセクシュアリティ』では、18世紀における女性と結婚した女性の文化的現象をとりあげ、男装によるジェンダーの偽装が異性愛中心主義のセクシュアリティ観のもとにおいて成立していたことを明らかにした。

(2) フェミニズムの言説とセクシュアリティ

①論文「男装の喜劇役者—マライア・エッジワース『ベリンダ』(一八〇一)」(『長い十八世紀の女性作家たち』所収)と査読英語論文“Cross-Dressing and Gender on the Stage: Maria Edgeworth's *Belinda*” (Ivy Never Sere 所収)では、マライア・エッジワースが小説『ベリンダ』(1800)において、当時のロマンティックな友愛者たちやサフィストたちのように男装をし、サッポアのように両性愛者で、しかもウルストンクラフトのような「女性の権利」論者でもある女性登場人物を徹底的に戯画化して描いたことを考察し、男装のフェミニストの戯画化に、同時代における強制的異性愛文化の誕生と近代フェミニズムの抑圧が反映されていることを明らかにした。

②依頼論文『アン・リスターのレスビアン日記』では、19世紀はじめに女性同性愛者としての自覚があったアン・リスターが他の女性に対するセクシュアルな行為を隠語で綴った日記を分析し、女性同性愛者の男嫌い、「男性的」雰囲気、および「ブルー(ストッキング)」の同一性が示されていることを明らかにした。

③依頼論文「ウルストンクラフトとサッポアと女性のセクシュアリティ」では、『女性の権利の擁護』においてウルストンクラフトは「男性的で理性的な」理想の女性たちの一人にサッポアの名前を挙げたが、彼女

の考える男性的女性像には、他の女性に対して淫らではない母性的かつ脱性的なロマンティックな友愛感情と、異性愛関係への根強い嫌悪が同居していることを明らかにした。一方、ウルストンクラフト自身は死後ゴドウィンによる伝記の中でオウィディウスのサッポロのように同性愛から異性愛への転換者として描かれたが故に、淫らなセクシュアリティの持ち主として批判されるようになったことを指摘した。

(3) サッポロの投身自殺表象とセクシュアリティ

① イギリス・ロマン派学会における口頭発表「男装のサッポロとセクシュアリティ」では、ウィリアム・メイソンが叙情劇詩「サッポロ」(1797)において、サッポロの投身自殺伝説に関する18世紀のさまざまな言説を消化した上で、自分のサッポロを男装させて、歴史上のサッポロの有名な「断片31」を他の女性に対して歌わせることにより、その詩の同性愛的内容を異性愛化するのに成功しただけではなく、さらに終幕では男性への愛からも完全に解放され、脱性化された女性詩人として描いたことを論じた。これはサッポロの投身自殺を伝統的な見方である男性への失恋の痛みを癒す手段ではなく、不滅の詩人として蘇生するための積極的な手段として提示している点で、メアリ・ロビンソンやメアリ・ヘイズなど当時のフェミニストたちのサッポロ観と相似していることを指摘した。上記口頭発表に加筆修正を施した論文「男装のサッポロとセクシュアリティ—ウィリアム・メイソンの抒情劇詩『サッポロ』」は査読を経て、『十八世紀イギリス文学研究(第4号)—交渉する文化と言語』(日本ジョンソン協会編)に収められて出版された。

② ギリシャのミソロンギで開催された国際バイロン学会における口頭発表“Byron and Sappho”では、バイロンが詩や日記などの中でサッポロや「ブルー」と呼ばれる女性作家たちを脱性化しようとする同時代の文化・社会的傾向を嘲笑する一方、サッポロを男女問わずすべての詩人の代表であると同時に愛の対象の性を問わずセクシュアリティに溢れた人物として肯定的に描いていることを論じ、そうしたサッポロ像や女性のセクシュアリティ観はイギリスにおけるサッポロの受容史上きわめて例外的であることを明らかにした。この発表は聴衆者たちから高い評価を獲得したので、本研究の独創性を確認することができた。

今後の展望としては、19世紀はじめの

バイロン以外の言説もより詳細に分析するとともに、ヴィクトリア朝時代との比較をおこなう方向に進む予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

① 川津雅江、『女性の夫』のジェンダー偽装とセクシュアリティ、人文科学論集、82号、2008、29-38

② 川津雅江、ウルストンクラフトとサッポロと女性のセクシュアリティ、ジェイン・オースティン研究、依頼論文、2号、2008、23-44

③ 川津雅江、アン・リスターのレスビアン日記、日本ジョンソン協会年報、依頼論文、32号、2008、10-14

〔学会発表〕(計5件)

① 川津雅江、Byron and Sappho, The 35th International Byron Conference, 2009年9月9日, Messolonghi, Greece

② 川津雅江、男装のサッポロと女性のセクシュアリティ、イギリス・ロマン派学会、2008年10月12日、四国大学

③ 川津雅江、18世紀イギリスにおける女性とセクシュアリティ、愛知女性研究者の会例会、招待発表、2007年9月30日、名古屋市公会堂

〔図書〕(計4件)

① 川津雅江、他、開拓社、十八世紀イギリス文学研究(第4号)—交渉する文化と言語、査読有、2010、440頁(pp. 294-314)

② 川津雅江、他、Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten、Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University、査読有、2009、555頁(pp. 61-74)

③ 川津雅江、他、英宝社、長い十八世紀の女性作家たち—アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで、2009、225頁(pp. 181-206)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川津 雅江 (KAWATSU MASAE)

名古屋経済大学・法学部・教授

研究者番号：30278387

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：